

# 学ぶ存在としての「子ども像」

小山田 建太 (筑波大学大学院／教育社会学)

## 学 校 II

- ◆ 種別：DVD（映画）
- ◆ 監督：山田洋次
- ◆ 脚本：山田洋次／朝間義隆
- ◆ 製作年：1996年
- ◆ 製作国：日本
- ◆ 発売／販売元：松竹
- ◆ 時間：本編 122分
- ◆ 音声：日本語
- ◆ 字幕：日本語
- ◆ 価格：¥3,800＋税 DVD 発売中



©1996 松竹株式会社／日本テレビ放送網株式会社／住友商事株式会社

### あらすじ

山田洋次監督の『学校』シリーズの第2作目であり、本作の舞台は北海道の高等養護学校（現在の特別支援学校）である。ストーリーは、学校に通う高志と佑矢が寮を脱走するところから始まる。クラスの担任である青山先生と小林先生は彼らの捜索を続けるなかで、彼らと過ごした3年間の学校生活を振り返る。

### シーン再現

<生徒である佑矢を眺める青山先生と小林先生>  
青山：紙をばら撒くことに今あの子の興味を集中させてんだよ。

小林：迷惑なだけですよ、そんなこと。誰が後片付けするんですか。

青山：あんたがやるんだよ。子供たちに迷惑かけられるのが教師の仕事でしょ。そのために高い月給貰ってるでしょ。それとも、教師が楽できるような手のかからない人間を作ることが、学校教育とでも思ってるの？ まさかそんなこと、優秀な成績で大学出たあんたが考えてるわけ無いだろ？

佑矢：ハーア。

青山：ほら、見ろ。面白くて仕方ないんだよ、今。何でも良いんだよ。まず子供との取っ掛かりを見つける。そして共感し合う。それで次の段階へ進めるんだから。

### Chapter

1. 行方不明／12'33
2. コンサート／6'01
3. 心の見えない新入生／10'45
4. 教師の役目って…／11'43
5. 高志の声／10'32
6. 作文コンクール／6'56
7. 辛い職業体験／16'15
8. 眠れない夜／4'40
9. 先輩を訪ねて／8'57
10. 帰らない覚悟／8'32
11. 空からの声／12'05
12. 卒業式／12'51

山田洋次監督の『学校』シリーズは、いわゆる普通の学校における学びを映した作品ではないが、そこから見える教育学的な視点とは何だろうか。

インタビュー映像のなかで山田監督は、子どもたちのおかれる状況について次のように語っている。かつては身近に「表に出ない、小さな、いたずらに近い犯罪がたくさんあったんじゃないか」…しかし、今の時代は「その罪のない小さな悪いことをたくさん犯す、ことが許されない」…。いたずらに代表されるように、子どもたちには様々な学びの場が必要なはずである。映画を通して監督が指摘するのは、多様な学びの可能性なのではないだろうか。そして、その根底にあるのは、確固たる「教育観」と、学ぶ存在としての「子ども像」であると捉え、考察を試みたい。

本作品の舞台は高等養護学校\*である。生徒である高志と佑矢は、様々な苦悩や葛藤を抱えながらも、それらに向き合い、克服し、力強くどんどん成長していく。成長のペースはそれぞれであり、その方法も抱える悩みも、成長した姿もそれぞれである。

そんな彼らも、自分たちの力だけで苦悩を克服できた訳ではない。そこにはいつも彼らに温かな目を配る教師がいたのである。「初めから手のかからない子どもなどいない」と語るベテラン教師の青山先生は、左頁の「シーン再現」にあるように、辛抱強く子どもの学びを見守っている。紙をばら撒くという一見すれば無意味に思われる活動であっても、子どもにとっては重要な学びの瞬間であるのだ。青山先生のもとで佑矢の指導を担当する新米の小林先生は、押さえつけるような指導のなかでは決して知り得なかった佑矢の成長の一つ一つや、そんな子どもたちに真摯に向き合う教師としての役割に気づいていく。

子どもはいつの時代、どんな状況においても、好奇心を持って学んでいく存在である。本作品が描く教育への視座から、子どもが学ぶ存在であることに改めて気づかされる。子どもとはあらゆる瞬間にあらゆることを、主体的に学んでいく存在なのである。ただ、これは子どもの学びが“放任”されるということではない。子どもの学びは、大人や社会の“無責任”の下で制限され、奪われる可能性があるのだ。教師が彼らの成長を辛抱強く待つ環境にあってこそ、彼らの学びが彼ら自身のものとなる。

子どもが真の意味で尊重されるということは、その子どもの学びが“放任”されず“抑圧”もされないで、遠すぎず近すぎないところから教師による温かな眼差しが向けられていることを言うのではないだろうか。本作品を貫く「教育観」は、学ぶ存在としての「子ども像」の承認と子どもの学びへの強い信頼に裏打ちされたものと言えるだろう。

※ 現在は「高等特別支援学校」に改称されているところが多い。高等部のみ単独で置かれ、職業的自立の支援等を旨としたカリキュラムが組まれている。

### Information

本文中に引用した山田監督のインタビューは、DVD『十五才 学校IV』（監督：山田洋次、制作年：2000年、本編：120分）に収録されている。この作品は、家出をして長い一人旅に出る十五才の少年が主人公である。「当たり前」の世界から抜け出した少年が様々な人たちとの交流を経て、一人の人間として立派に成長していく姿が描かれている。